



元陸軍兵器工場の寮で始めた 終戦後の養育院附属病院

櫻園通信 49. 平成 30 年 8 月

東京都健康長寿医療センター

養育院・渋沢記念コーナー

連絡先: 老年学情報センター

文・編集 宮本孝一 老年学情報センター

資料提供 玉越慶弘 養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア

1945 年（昭和 20）終戦

1946 年（昭和 21）元陸軍造兵廠大山宿舎に医務課（養育院の病院部門）を開設

1947 年（昭和 22）医務課を**養育院附属病院**に改称

※1958 年（昭和 33）元陸軍造兵廠大山宿舎を国に返還

陸軍造兵廠大山宿舎（北区戦後 70 年誌 記憶が紡ぐ平和への願い 北区役所総務部平成 28 年発行より）



1958 年（昭和 33）本院敷地に養育院附属病院開設



1972 年（昭和 47）養育院附属病院 改築



1986 年（昭和 61）東京都老人医療センターに改称

現在の敷地にあった養育院本院は、昭和 20 年の B 29 による空襲で、施設の 9 割を焼失しました。

終戦後、すぐに復旧することは難しかったため、軍の施設での事業再開が図られました。最も急を要していたのは病人の治療・入院体制の確保でした。

昭和 21 年、板橋区内にあった元陸軍造兵廠の宿舎を使って養育院本院の病院部門**医務課**が再開されました。翌年、医務課は**養育院附属病院**と改称されます。敷地にはレントゲン室（昭和 23 年）や手術室（昭和 25 年）も新たに作られました。

開設直後から在院の患者年間約 600 名のほか院外からの外来患者も受け入れ、多忙を極めました。長期入院の患者も増え、新しい患者を受け入れることも困難でした。また、宿舎の建物は木造で老朽化が激しく、防火上の不安がありました。そこで昭和 25 年に、新病院建設の検討が始まります。

新しい附属病院は、現在の敷地の中に昭和 33 年に開設。同時に大山宿舎は国に返還されました。

昭和 40 年代になると都内の寝たきり老人の増加が問題視され、都で老人専門病院設置（老人病と老化の基礎研究を行う研究所を併設）の検討が始まりました。その結果、養育院在院者専用病院ではなく一般都民を対象とした病院として、昭和 47 年に新たな**養育院附属病院**と**東京都老人総合研究所**がスタートしました。

養育院附属病院を改称した**東京都老人医療センター**と**東京都老人総合研究所**は、平成 21 年に経営統合し、現在の**東京都健康長寿医療センター**になりました。

2009 年（平成 21 年）地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター発足

2013 年（平成 25 年）新病院に移転



陸軍第一造兵廠大山宿舎に作られた
養育院附属病院

板橋区 4 丁目 1289 番地（旧番地）

（養育院八十年史より図改変）

①事務室

②薬局・治療室

③病棟

④病棟・寄宿舍

⑤⑥寄宿舍

⑦病棟・炊事場 ⑧浴場

⑨病棟
⑩職員寮

洗濯場

手術室

レントゲン室



google マップより

google マップより
航空写真

現在の旧養育院附属病院跡地
板橋区幸町 45 番地（現在の番地）





明治 6 年に建立の大雄寺の養育院『義葬之冢』について

稲松孝思

養育院は明治 5（1872）年に創立された東京の福祉・医療施設である。当初は鰥寡孤独の人を収容する施設であったが、150 年近い歴史の中で各種福祉・医療施設に発展分化した。その歴史については、養育院 60 年史、70 年史、80 年史、100 年史、120 年史が編まれている。大久保一翁がその設立に、渋沢栄一が、半世紀以上に亘ってその維持・発展に大きく貢献している。「養育院」の文献資料の一部は残されているが、明治・大正期の建造物など、施設の多くが木造であり、関東大震災、先の戦災、施設の引っ越しなどで、形あるものはほとんど失われている。同時期に渋沢が関与して創設された富岡製糸場が、今日、世界遺産として残されているのと好対照をなす。そこで、僅かに残されている養育院史を語る、“形ある物”のうち、もっとも古い、谷中の大雄寺にある『義葬乃冢』について述べる。

黎明期の養育院

明治 5 年 10 月、ロシア大公アレクセイを国賓として迎えるに当たって、急遽収容された浮浪者を本郷の加賀藩上屋敷の空き長屋（現東京大学）に収容した事が、養育院事業のはじめとされる。五日後に収容者は浅草溜に移され、長屋は事務所として使用されたが、その痕跡はない。明治 6 年 2 月、上野の護国院の一部（現東京芸術大学美術学部）を買い取って恒久施設を建設し、大久保一翁府知事が開院時に視察しているが、その痕跡もない。漢方の町医村上正名が任用され、健康問題に対応したが、同年 12 月までに 104 人が死亡した。遺骨の引き取り手がなく、賄方赤井善蔵の菩提寺、台東区谷中の真言宗・大雄寺に葬り、「義葬之冢」が建てられた。この「義葬之冢」が、明治初期の養育院を語る唯一の“形ある物”である。

- 明治 5 年 10 月、ロシア王子アレクセイの来日（国賓）
- 東京府内の浮浪者を加賀藩上屋敷空長屋に 250 人収容
- 5 日後、浅草溜め移管、長谷部
- 明治 6 年 2 月、上野・護国院の一部を購入、改装し養育院恒久施設開院
- 大久保一翁東京府知事視察
 - 鰥寡孤独廃疾の者を収容
 - 養育院掟書：伍長規則、看護人規則、患者の心得、食堂規則、浴室規則…
 - 賄：赤井善蔵
 - 町医：村上正名、医療担当
- 引き取り手のない遺骸を赤井家の菩提寺大雄寺に埋葬
- 明治 6 年 12 月合葬塚建立 104 名



大雄寺（ダイオウジ）について

大雄寺は、台東区の谷中霊園の近くにある日蓮宗の寺院であり、地図に示すように、JR 日暮里駅より徒歩 8 分のところにある。慶長 9 年(1604)、神田土手下に創建され、万治元年(1658)に現地へ移転。境内には、推定樹齢 200～300 年の都内最大級のクスノキ（幹回 6.2m、樹高 13m、枝張 12m）があり、「台東区みどりの条例」保護樹木に指定されている。春には枝垂桜が美しく、四季折々の風景を楽しめる。幕末の三舟の一人、高橋泥舟のお墓がある。

明治 5 年に「養育院」が作られたとき、その賄を赤井善蔵が受注した。養育院収容者が亡くなり、御遺体の引き取り手が無い場合、赤井が、自身の菩提寺である大雄寺に頼み込み、葬ったのがそのはじめである。境内には赤井家の大きなお墓がある。

左手の墓地の奥に、隣との境界のブロック塀に接してお墓がある。高さ 151 cm の扁平な角柱型の三段墓である。正面には『義葬之冢』と彫ってある。無縁墓の意であるが、「義葬」・・・に、この塚を作った人の思いがにじむ。隣家との境のブロック塀に近接する墓石の裏に、なにやら彫ってあるが、全体は読めない。狭い空間にカメラを差し込んで、何とか全体を判読した。『明治六年癸酉始養窮民於養育院其死者葬此』と彫ってある。「明治 6 年に養育院ではじめて窮民をお世話したが、そこで亡くなった人をここに葬った。明治 6 年」という意味である。

住職をお願いして寺の過去帳を拝見した。古ぼけた霊簿に当寺に葬られた諸霊が墨書されているが、その中に養育院関係の 104 名の記載がある。

年齢、性別なく、戒名は6名に付され、他は俗名である。姓はなく、吉蔵や常女などの名前だけが記載されている。名前から性別を推測すると、男 81 名、女 22 名、不明 1 名である。



ちなみに養育院 60 年史を紐解き、年齢記載がある 22 名の死亡者についてみると、1-20 歳 3 名、21-40 歳 11 名歳、41-60 歳 5 名、61-80 歳 6 名、不詳 1 名であった。この義葬之家は養育院創立当時の唯一の遺構である。長年この塚を東京都で維持し、春秋に香華・卒塔婆を手向けてきたが、養育院廃止に際し永代供養の手続きをした。平成 22 年には『養育院を語り継ぐ会』の由来碑が立てられた。

なお同寺境内には、勝海舟、山岡鉄舟とともに、幕末の三舟と言われる高橋泥舟も葬られている。勝、山岡の幕末における活躍は有名であるが、高橋はあまり知られていない。本名は高橋精一郎であり、山岡鉄舟の義兄にあたる。旗本の槍の名人で、徳川慶喜の側近であった。江戸開城交渉で西郷との交渉を勝に託されたが、慶喜の警護役のため、交渉を山岡に託したという。維新後は、徳川家に節を通し、骨董の鑑定や書を以って糊口とした人である。ちなみに、旧旗本であった、勝麟太郎：海舟、山岡鉄太郎：鉄舟、高橋は“かちかち山の泥舟さ！”と「泥舟」と称した。3 人とも書を良くし、維新後は多数の墨蹟を残したため幕末の 3 舟といわれている。ちなみに大久保一翁（勝海舟を世に出した人、江戸開城時の若年寄、養育院を作ったときに東京府知事）は石舟（？）、幕末、明治初期の外交官として活躍した田辺太一（遣米、遣欧、岩倉使節団）は蓮舟、木村喜毅（咸臨丸提督、幕末の勘定奉行）は芥舟と号している。幕末に江戸幕府の高官であった人たちの号の舟尽くしに、なにやら意味深長なものを感じている。



義葬之家 背面の記載
明治六年癸酉始養窮民於養育院其死者



板橋の養育院キャンパス

稲松孝思

「養育院」は、1872(明治5年)に大久保一翁府知事の時に作られた、身寄りのない困窮者を保護する施設である。その維持、発展には半世紀を超える渋沢栄一の尽力が大きく貢献している。養育院運営の中核である本院は、本郷⇒上野⇒神田和泉町⇒本所長岡町⇒大塚辻町と転々としている。大規模化し、目的に合わせた分院が次々と設置されたのは、東京市営となった大塚本院の時代である。渋沢養育院長のもとで、幹事の安達憲忠や田中太郎、医師の入沢達吉、光田健輔らの尽力でなされたことである。また、大塚が繁華になり、施設の大型化に伴い手狭になったため、大塚の敷地を売却し、多方面からの寄付を集め、板橋の地主の協力を得て、広大な土地を確保した。1914(大正3)年に慢性疾患患者(結核)用に板橋分院を東武東上線の西側に開設した。引き続き東側の競馬場跡地の南側に、本院の移設工事を行っていた。新築完成直前の1923(大正12)年に、関東大震災で、大塚本院が壊滅したため、急遽本院を板橋に移転した。

板橋に移転後、渋沢の貢献を顕彰する東京市民の会が作られ、1925(大正14)年に台座を含めて高さ8mの巨大な銅像が作られた。除幕式には渋沢本人も参列し、銅像の前で謝辞を述べている。写真は新築の板橋本院を背にする渋沢銅像である。

昨年、旧養育院職員の営繕課長を勤めた故金山栄治さんのご遺族から、「養育院建築史」と関連資料を寄託された。養育院100年史の基礎資料として作られた手書きの資料である。その中に、1970年ころまでの、板橋キャンパスの推移を書いた興味深いものがあった。その後、独立法人化に伴う大きな変化もあるが、それを含めて板橋キャンパスの変遷についてまとめた。

板橋キャンパス 1940(昭和15)年ころまでの変遷

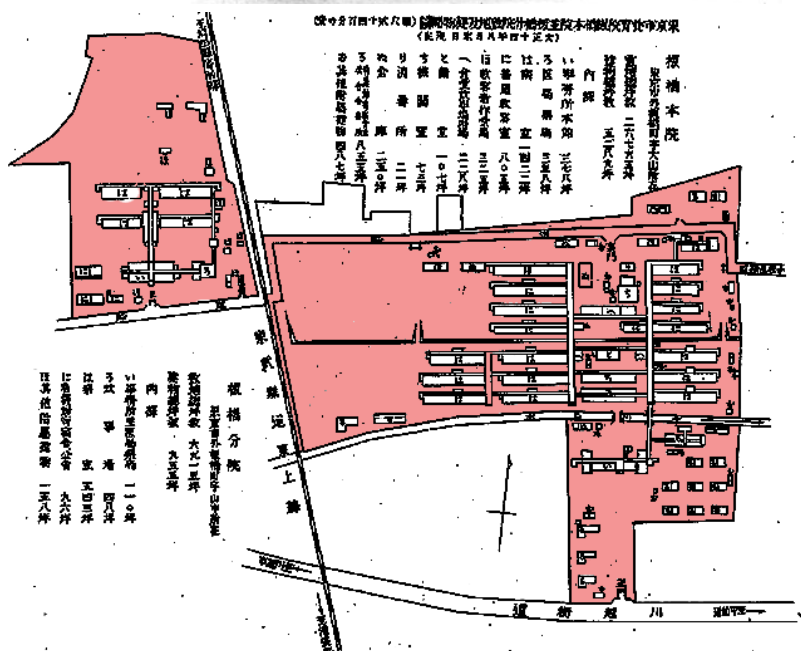
大正14年に板橋本院が完成したころの地図を示す。旧川越街道に面して、本院事務所。銅像を中心とした庭園、職員宿舎、楽翁亭が作られた。敷地内を貫く千川用水を隔てて、老人ホーム(恵風寮4棟+食堂)、育児室、礼拝堂、家族室、自習寮、ボイラー室、防火壁などが30棟ほどの建物が作られている。本院から施設に行くために千川用水に橋がかけられた。昭和5年に千川用水は暗渠化され、都市計画道路(養育院通り)が作られ、用水の橋は道路をまたぐ上屋附陸橋となった(櫻園通信16号)。

“養育院”とは

精神病、ハンセン氏病、児童福祉、高齢者福祉などで専門の施設に発展し、そのことが、日本の医療・福祉の歴史になっている。

時代の求めに応じて、医療・福祉事業を展開

- 狂人病室設置(明8) ⇒ 癲狂院 ⇒ 巢鴨病院 ⇒ 松沢病院
- 捨児・迷子の養育(明18) 里親・職親制度、児教育、幼童室 ⇒ 巢鴨分院⇒石神井学園
- 回春室:ハンセン病(明32) ⇒ 多摩全生園、長島愛生園など
- 結核病室(明22)⇒勝山保養所、安房分院、板橋分院
- 感化部(明38)⇒井の頭学校 ⇒ 萩山実務学校、八街学園
- 安房臨海保養所・分院(明33):虚弱児 ⇒ 船形学園、
- 長浦更正農場(昭17):障害児 ⇒ 千葉福祉園
- 看護養成所(明29) ⇒ 板橋看護専門学校



また、東上線を超えた西側の敷地には、慢性疾患患者の板橋分院があり。昭和 10 年に外来診療棟で一般住民の診療も始めている。男子病棟 6 棟、女子・児童棟 3 棟、回復期棟 1 棟、隔離病棟 1 棟、分室等 4 棟。地域住民の訴えで、周辺は高い塀で囲まれていた。大正 14 年の段階で板橋本院は敷地総坪数 26.535 坪、建物 5.289 坪、板橋分院敷地 6915 坪、建物 955 坪であり、大塚本院の敷地 15.090、建物 3560 坪と、倍以上の広さになる。



北部大空襲(昭和 20 年 4 月 13 日)

米軍の B29 による焼夷弾の無差別爆撃の洗礼を受け、板橋本院の建物 78 棟 5.627 坪、ボイラー、厨房設備、附属工作物など、9 割の建物が灰燼に帰し、当日の在院者 1,599 人中、107 人の犠牲者を出した。焼け残ったのは、恵風寮と育児室のみの 1 割程度の建物であった。この日の北部大空襲では都民 2459 人の死亡が報告されている。

焼け跡からの復興

終戦当時の在院者は従来からの 1200 人程度であったが、これに加え、戦災被害者、戦後の外地引揚者、戦災孤児などの新たな収容が求められ、昭和 20 年末の在院者は 11422 人を数え、若年者も多く混乱を極めた。昭和 21 年には元陸軍造兵廠大山宿舎を医務課・養育院附属病院とし、昭和 33 年に、板橋区米町に新病院が出来るまで移動した。(櫻園通信 49 号)。

また、第一陸軍練馬造兵廠への本院移転も模索されたが、GHQ との関係でうまくいかず、一部を使用して昭和 22 年 12 (9) 月に練馬分院を移動させた。開設 1 ヶ月後の在院者は 232 名、昭和 27 年 3 月には 486 名であった。昭和 30 年に東村山分院完成後、収容者は移り、練馬分院は閉鎖された。(櫻園通信 x)

戦後の特殊事情として、昭和 21 年には上野などの浮浪児化した戦災孤児を毎月 2~3 回、40~50 人程度収容した。逃亡者が続出して 35% に上り、逃亡を阻止する様にとの GHQ の指示で、竹囲が作られた。

板橋区の都市計画との葛藤

養育院は、戦災跡地に新しい施設を建てることを検討していた。一方、板橋区ではこの機に養育院を移転させ、跡地を公園などにする都市計画を提案し、養育院施設を追い出すキャンペーンが張られた。種々の困難な協議が行われた。昭和 24 年 4 月の協議会における GHQ 民生局のキャロー女子の発言で、養育院の現地復興が決定し、用地の一部を、学校、文化施設、公園用地を割譲することで、妥協が図られた。この辺の事情については、櫻園通信 52 号の金山氏の記録に譲る。なお、戦後、アメリカの大量のラウ物資の供与、慰問団の訪問が行われている。また、皇室の高松宮、梨本宮妃、が訪れ、昭和 24 年 3 月には、昭和天皇ご夫妻が行幸された。東京の代表的な福祉施設である養育院の民生上の重要性を考えた判断と思われる。

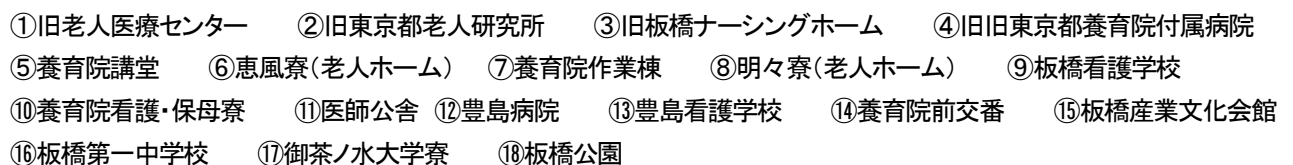
昭和 47 年の板橋の養育院

東京都の中期計画で美濃部都知事の時代に、将来の高齢化時代を見据えた計画が実施された。従来からの養育院高齢者を対象とする老人ホームを維持する一方、一般都民をも対象とした 11 階建ての新病院、老人総合研究所、板橋ナーシングホームなどの新規高齢者施設が次々建てられ、板橋の養育院事業は老人問題に特化して行く。また、板橋分院は、看護学校、職員寮、一部病院の建物となった。病院-高齢者施設-研究所の三位一体の運営が試みられた時代である。昭和 50 年ごろの各施設の模型を写真に示す。またこの時期に、東村山に養育院分院、第二附属病院が作られ、養育院事業のひとつの柱となった。



養育院の廃止と関連施設の独立法人化

平成 10 年に、養育院の本院機能は新宿の都庁に移り、養育院条例は廃止された。東京都は、都立病院、福祉施設、研究所



健康長寿医療センターの敷地

旧養育院用地(1940)と健康長寿医療センター(2019)

①→②→③→④→⑤は渋沢栄一銅像の位置の変遷を示す。



手前は老人医療センター・老人総合研究所

左奥の建設中の建物が、現東京都健康長寿医療センター





元祖ヒポクラテスの木
(ギリシャ コス島)

西洋医学の源流から 時空を超えてやってきた

生きた遺跡

櫻園通信 52. 平成 31 年 2 月

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー

稲松孝思 顧問医
宮本孝一 老年学情報センター

東京都健康長寿医療センターの大きな白い看板のうしろに、プラタナスの木が植えられています。センターの新施設建設・移転の際にこの場所に植えられました。

この木はもともと、東京大学医学図書館（文京区本郷）の前にあるプラタナス（ヒポクラテスの木）の下に生えていた実生苗でした。2012 年に許可をもらって苗を入手し、写真のように植木鉢で育てて、リハビリテーション前の屋上庭園に地植えし、2014 年春に現在の場所に植え替えました。

東大の木は、1976 年にギリシャのコス島から入手した苗が育ったものです。さらにその親の木は、ヒポクラテスの生まれたコス島の、西洋医学の源流となった場所に立つプラタナスの木です。西洋医学に大きな影響を残し、今も「医聖」「医学の父」と呼ばれるヒポクラテスが、その木の下で医学教育を行ったとされ、**ヒポクラテスの木**と呼ばれています。

東京都健康長寿医療センターの正門脇で育っているプラタナスは、西洋医学の源流からはるばるやってきた“生きた遺跡”なのです。（**櫻園通信 11 号 2014 年**）

2012 年から育てられた健康長寿医療センターの**ヒポクラテスの木**の、2019 年現在の姿をみてみましょう。



撮影 2014 年 4 月



撮影 2019 年 1 月

細い苗を支えていた支えの棒を、成長した幹がのみこんでしまいました。



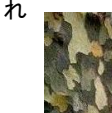
植えた時に指の太さぐらいだった幹は、だいぶ太くなりました。
木の高さも、センターの大看板を越える高さに成長しています。

プラタナス（スズカケノキ）は大別して 3 種類あります。（**櫻園通信 12 2014 年**）。

①プラタナス・・・ヒマラヤ原産。ヨーロッパにも分布。**ヒポクラテスの木**もこの種類。

②アメリカスズカケノキ・・・北米原産。

③モミジバスズカケノキ・・・①と②を、18 世紀のイギリスの植物ハンターが、庭に並べて植えておいたら自然交雑して出来た雑種です。その後、品種改良され、2 種の遺伝子が混ざりあった多くの株が作られましたが、これらを総称してモミジスズカケノキと呼ばれます。

	プラタナス	アメリカスズカケノキ	モミジバスズカケノキ
葉	 切れ込みが深い	 切れ込みが浅い	 切れ込みは葉身の半分
実	 3～5 個が縦に並ぶ	 1 個ずつ	 2.3 個が縦に繋がるか、または枝分かれ
樹皮	 大きく剥がれる	 縦に割れ目剥がれない	 大きく剥がれる



赤・・・1つの柄に 3、4 個ぶらさがるヨーロッパ型
黄・・・2 個ずつぶらさがるモミジバ型
その他・・・1つの柄に 1 個

幹の樹皮をみると、タテに細かくひび割れるアメリカ型と、不定形に剥がれる部分とが混在していました。全体的に見ると、若い木のせいか樹皮が剥がれていない部分が目立ちます。プラタナスの樹皮に種の違いが顕著に表れるのは老木になってからです。

ヒポクラテスは 2000 年以上昔の人で、ギリシャの**元祖ヒポクラテスの木**も何代目かの子孫です。健康長寿医療センターの**ヒポクラテスの木**も単純なクローンではなさそうです。

医学の道も、時を経る中で、少しづ変わってゆくのでしょうか・・・

なお、実は集合果で、その形からスズカケノキとも言われます。

日本各地に植樹された**ヒポクラテスの木**の子孫は、挿し木で増やされたもの、実生苗から育てた木など、日本全国の医育機関などに 100 本以上植えられています。その、葉や実や幹を仔細に見ると、それぞれに異なる点があり、アメリカプラタナスの遺伝子が混じっているようで、ギリシャの親木の単純なクローンではないようです。

健康長寿医療センターの**ヒポクラテスの木**はどうか。写真は葉が落ちたあとに撮影したのですが、中東型（縦に数個）、アメリカ型（1 個ずつ）、モミジバ型（2 個セット）が混在しています。もっと早い時期に観察した時も 3 通りの実が見られました。



アメリカ型？



プラタナス型？

同じ幹で、場所により樹皮の形状がちがっている



スズカケとは、山伏が着る装束の名前



板橋本院 土地ものがたり

櫻園通信 53. 平成 31 年 3 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター
稲松孝思 宮本孝一

旧養育院職員であった故金山栄治さんのご遺族から、**養育院建築史**と関連資料、そして**板橋本院土地ものがたり**と題した手記がセンターに寄贈されました。形見品の散逸を恐れ、保存してもらえないかとお持ちくださいました。

金山氏は大正2年のお生まれで、長く養育院関連施設に勤務し、課長職で定年を迎えました。

板橋本院土地ものがたりは、手書きの手記を糸で綴じた小冊子です。手記の終半に「昭和四十五年吉春稿」という記載があります。

養育院の勤務を終えて帰る途中の金山氏が「**養育院は渋沢さんの銅像をおろして、宮本さんの銅像をあげるべきだ**」と語る老人に出会う場面から話が始まります。

宮本さんとは誰なのか？板橋の養育院とどんな関係のあった人物なのか？「渋沢銅像をおろせ」という老人は何者なのか？

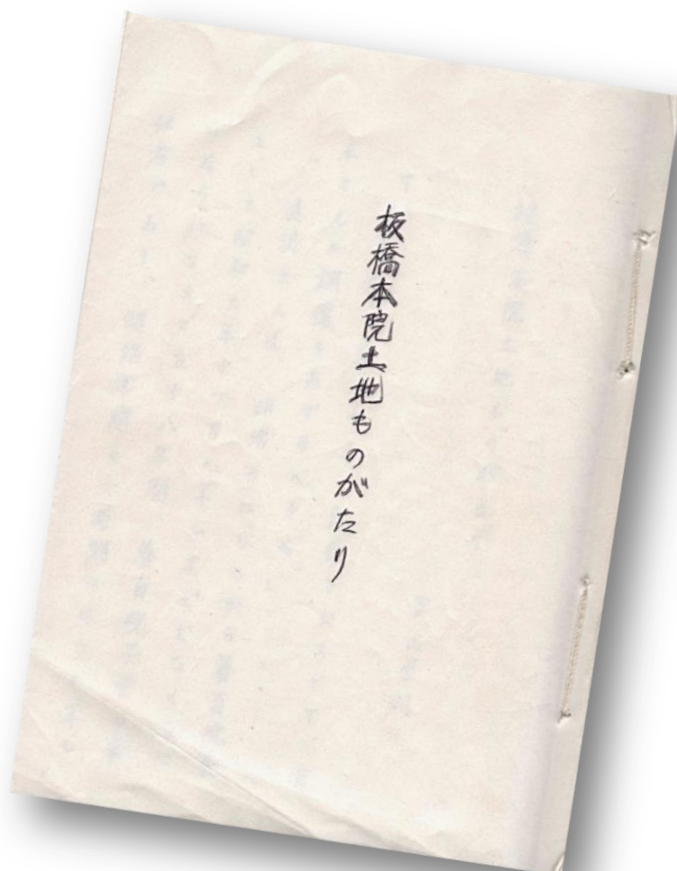
渋沢栄一を尊敬してやまない金山氏はたいへん驚き、その老人の意見に立腹します。

そして、養育院本院の経緯をあらためて調べることにしました。

大塚にあった養育院本院が関東大震災で被災し、板橋競馬場があった広大な荒地が移転先に選ばれると、地元の多くの地主が反対運動を始めました。

東京府議会議長花井源兵衛氏や**板橋町長宮本知達氏**の支援を頼って地主の説得が進められましたが、用地獲得は非常に困難な道のりでした。金山氏はこの手記に当時の事情を綴っています。

地主と養育院・東京市の間立たされた宮本町長自身の所有地も、養育院の入口を川越街道に面して作る必要から、養育院の用地計画に含まれてしまっていました。



手記の後半では、養育院の移転から、大空襲、戦後の土地計画、養育院立ち退き問題を経て、手記執筆当時に至る経緯が整理されています。

大震災後で被災した養育院の移転（大正時代）も戦後の事業復興も、地元との摩擦の中での大変な難産だったことを、この手記から知ることができます。

その難産の渦中で養育院の事業再開・復興の道を切り開いた人たちの中に **2 人の宮本さん** がいたことを金山氏は明らかにしています。初代宮本知達氏（板橋町長）と二代目宮本知達氏（戦後の板橋区議）です。

かつて老人が主張した「養育院の恩人は宮本さんだ」とは、おそらくこのことだったのでしょう。



金山氏「板橋本院土地ものがたり」をスキャンして、再製本しました。養育院・渋沢記念コーナーに置きますので、ぜひ手にとってご覧ください。

貸出・持ち出しはできません。コーナーでご覧ください。



板橋本院土地ものがたりと併せてご寄贈いただいた**養育院建築史**は、手書きの文章と写真や図面のコピーが綴られた、厚さ 4 cm ほどの冊子です。

大塚本院、板橋分院・本院、千川用水暗渠化、巣鴨分院、石神井学園、安房分院、井の頭学校、長浦分院、栃木分院、八街学園、伊豆山老人ホーム、東村山分院、練馬分院、東京都むさしの園、付属病院などの施設の情報が、建築面を中心に詳細にまとめられています。

定年後の昭和 40 年ごろに、養育院百年誌（一番ヶ瀬康子編纂）の基礎資料として作成した冊子とのことです。